地球市民とは？

20110920　庄司興吉

地球市民とはどんな人のことをいうのだろうか。

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起こった。東北から関東にかけての太平洋岸で、強い地震で建物などが倒壊したばかりでなく、ところによっては数十メートルにおよぶ高さの津波が押し寄せ、多くの都市が壊滅的な被害を受けた。

地球市民とは、ひとつには、こうした不意の災害のとき、地球上のどこからでも駆けつけて、被害を最小限にくいとめるべく決死の援助をしてくれる人びとのことである。日本にも多くの国から救援隊が訪れ、被害者の救助にあたった。

しかし、このたびの大震災の一環として、福島では原子力発電所が津波に襲われ、原子炉の冷却装置が働かなくなって崩壊し、多くの放射能が出はじめた。このニュースが伝わると、救援隊を派遣した国の多くが撤退の指令を出し、救援隊の多くが引き上げていった。

そのごの地震と津波による被害者の救援は地元の消防隊や自衛隊によっておこなわれた。福島では原子炉の崩壊を早期にくいとめる作業がなされたが、必ずしも功を奏さず、放射能の影響が周囲に広がりはじめ、多くの人びとが避難のため居住地を離れざるをえなかった。

地震と津波の被災地では仮設住宅の建設も進み、そこに移り住む人びとも増えたが、いろいろな理由から移住や再建がうまく行かず、いまだに困っている人びとが少なくない。原発事故の影響はときとともに広い範囲に広がり、被災者たちはもとの地域を離れて不自由な生活を強いられている。

地震と津波の被災地には、日本中から多くの物資が送られ、義援金が送られ、救助や支援のための人びとも送られた。また、原発事故の被災者にもさまざまな形で援助の手がさしのべられた。ボランティア活動も盛んにおこなわれてきている。しかし、被災者たちの数や被害状況の深刻さに較べると救援はまだまだ十分とはいえず、被災地の復旧復興はまだほんの少ししか手をつけられていない。原発事故はまだ完全に終息すらしていない。

どうしてこんなことになったのだろうか。地球市民としては、現に困っている人びとを少しでも助けるために、できるだけのことをしなければならない。しかし、それと同時に、どうしてこんなことになったのかを考え、二度と同じような災害を起こさないために、できるだけ根本的な解決策をとらなければならない。

その点でいうと、今回の未曾有の災害は二重である。第一に地震と津波。これはたしかに自然現象で、現在の科学ではまだ正確に予知するのはむずかしいが、しかし、想定ができなかったわけではない。数百年に一度などというけれども過去にも例があり、現在の科学でも想定はできるのである。それならばなぜ、それに対応した地域づくり、都市づくり、そして国づくりをおこなってこなかったのか。

第二に原発事故。これは明らかに、エネルギー源にかんする私たちの選択の結果で、人災である。私たちの生活と文明を維持するためのエネルギー源としては、原子力いがいにもいろいろあり、とくに自然エネルギーはその気になって本気で開発すれば、かなりの量

を調達できる。とくに日本人のような、広島長崎の被爆体験をもつ人びとが、なぜ原子力エネルギーに頼ってしまったのか。

市民とは、自分の生き方を自分で決め、そのことをつうじて、自分たちの社会のあり方・行き方を自分たちで決めていく人間のことである。そのために私たちは、選挙で自分たちの代表を選び、民主的な討議で社会のあり方・国のあり方を決めていく制度をつくってきた。そうした人間たちが地球上に広がり、おたがいに助け合うようになったら、私たちは地球市民の時代について語り合えるようになってきたのである。

原発事故の放射能被害はだれにとっても怖いものだから、地震津波の被害から私たちを救おうとやってきてくれた人たちが、原発事故が起こったからといって引き上げても、私たちはその人びとを非難することはできない。それよりも私たちは、そういうエネルギー源を選択してきた私たち自身のあり方を反省し、これからも想定される地震や津波にも耐え、自然を汚さず、私たちの生活と文明を維持するためにも十分なエネルギー源によって、私たちの社会と国を建て直していかなければならないのである。

民主主義の制度はできているのだから、それがうまく働いていなければ直しながら、私たちは、地球上の他の市民たちと協力し、必ず、このたびのような地震と津波にも強く、原発事故も起こさない社会と国をつくっていくことができる。そう考えて実践していけるような人間こそ、地球市民なのではないであろうか。